

特集

子どもと建物・環境



子どもと環境

仙田 満

子どもの劣化

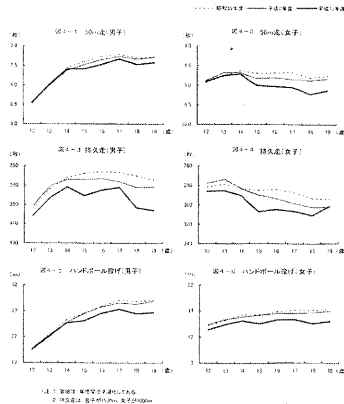
今、新聞やテレビのニュースで子どもの問題が出ない日はありません。三分の一ぐらいが子どもの問題ではないでしょうか。子どもが、さまざまな「劣化」とも呼ばれる、危機的問題に遭遇しています。

子どもの体格はこの四十年ほどで変化してきましたが、注目すべきは体重で、ほかの体位に比べると圧倒的に増えています。これは全体に日本の子ども

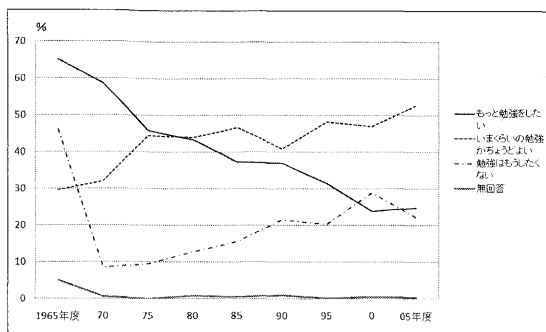
もが肥満になっているということを示しています。

体力の変化を見てみます(図①)。十年ごとに比べてみますと、落ちていく幅は一概にいえませんが、明らかに低下しています。日本の子どもは上位と下位に二極分化しているそうです。小さいころから、ゴルフ、水泳、あるいはスケートなど、プロを

目指して一生懸命やっている子どもは非常に大きな運動能力、体力を獲得していますが、一般の子どもの体力はどんどん低下しています。



▲図① 体力の変化 昭和55年度、平成2年度、平成12年度の推移、50m走、持久力、ハンドボール投げのすべてで、ほぼ低下。



▲図② 藤沢市「2005年の学習意識調査の結果に見る中3生徒の学習意識」より

不登校は、一九九一年度から二〇〇〇年度の十年間で約五倍になっています。虐待の事例は統計を取り始めてから三十倍になっています。

藤沢市の教育文化センターでは、学習意欲調査を一九六五年から継続しています(図②)。学習時間

は一九六五年(二〇〇五年までの、四十年間でかなり短くなっています。また学習の意欲、もっと勉強したいという子どもも減っています。このように、子ども

もの意欲が非常に低下しています。

この運動能力、体力、やる気という部分が低下している理由は、小さな子どものときから元気に外あそびをしていないことではないかと考えています。

あそびによって開発される能力

あそび環境によって開発される人間の能力は四つあります。まず身体性です。体力、運動能力です。小さいときから歩く、運動するということを習慣として身に付けない人は、大人になっても歩かない、運動しないという傾向をもつといわれています。やはり子どものときから歩く、運動するということを習慣とする必要があります。

二番目は社会性です。アメリカの作家のロバート・フルガムは『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』(河出書房新社、一九九六年)という本の中で、「仲良く遊ぶ、仲直りをするという

人間関係は、大学や大学院ではなくて、幼稚園の砂場で遊びながら学ぶ」と書いています。社会性の開発は群れて遊ぶことの結果として非常に重要だと思っています。

三番目は感性です。感性とは感受性や心の豊かさです。特に自然の中で遊ぶことによって、感性は開発されます。外あそびの中で、自然の変化や美しさ感動する、あるいはかわいがっていた動物が死んでしまうというような生死を体験し、心を豊かなものにしていきます。そういう意味で、自然と触れ合う自然あそびは、感性開発に極めて重要な部分だと思っています。

四番目に創造性です。新しく物を作っていくという能力です。子どものあそびは、ある意味で非常に感覚的です。教育とは違って、強制されず、自分から自主的に行うのがあそびです。イギリスの動物学者のデズモンド・モリスが、『人間動物園』（新潮

社、一九七〇年）という本の中の扉に「遊びは創造性の開発をボーナスとしてもたらす」と書いています。彼は若いチンパンジーは、一つのあそびを偶然発見すると、さらにそれを上回る楽しいあそびを考えだそうと言っています。あそびのもっている創造性の開発を指摘しています。

この四つの「身体性」、「社会性」、「感性」、「創造性」と能力が、子どものあそび環境やあそび体験を通じて開発されていくのではないかと考えています。逆にいえば、あそびを阻害された子どもは、これらの能力を開発する機会を失うのではないかと思っています。

あそび環境

あそび環境は「あそび場」、「あそび時間」、「あそび集団」、「あそびの方法」の四つのエレメントで構成されています。

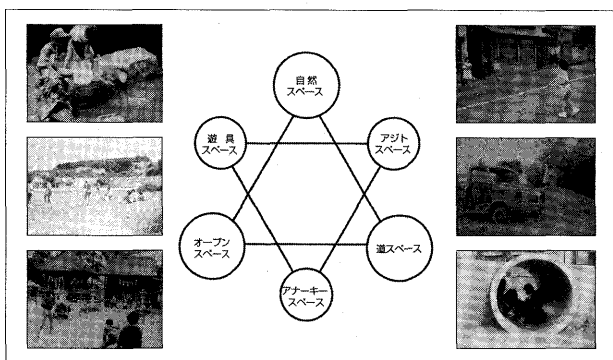
日本の子どものあそび環境は一九六〇年代に大きく変わりました。それは自動車交通の発達とテレビの出現です。自動車によって身近なあそび道が奪われ、子どもは急激にあそび場を失い、その受け皿になったのがテレビです。外あそびから内あそびに転換していききました。あそび場だけがあっても遊べないし、あそび時間がなければ遊べません。また少子化によってあそび仲間は減っています。さらにそのあそび仲間が同年齢化してしまっています。多様な年齢のあそび集団ではなくなっています。

あそび空間

「あそび空間」には、図③のように六つの空間があると考えています。まず「自然スペース」です。自然スペースとはかのスペースの違いは生物がいるということ。自然スペースでのあそびを「採集のあそび」と名付けています。魚を釣るとか花を摘むと

かカキの実を食べるといような採集のあそびが基本です。いつ、どこに行ったらカブトムシが採れるかということを知らなければ遊ぶことができません。自然というのは危険な場所でもあります。どこが危

険な場所かということ
を伝承され
て自然あそ
びの達人に
なります。
今、田舎の
子どもでも
自然あそび
ができなく
なっていま
す。それは
自然あそび



▲図③ 子どもの6つのあそび空間

の伝承がなくなっているからです。

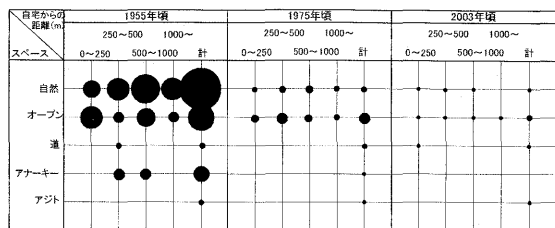
あそび空間として、「道スペース」も非常に重要です。平凡ライブラリーから出版された渡辺京二さんの『逝きし世の面影』（二〇〇五年）という本では、江戸末期から明治、大正のころに日本を訪れた外国人が、日本の都市の状況を紀行文や日記に書いたものを集めています。その中で「子どもの樂園」という章があり、当時の子どもは、路地、道でとにかく遊び回っていたということを外国人が非常に感嘆して書いています。樋口一葉の『たけくらべ』にもあるように当時の子どものあそび場の基本は道だといえます。これが自動車の発達によって遊んではいけないものになったのは、ほんのこの四十年ぐらいのことです。

「オープンスペース」、「広場のスペース」も重要です。子どもが思い切って走り回れる、駆け回れる、そういう広がりのあるスペースが子どもの身の回り

に必要です。

そのほかに、「アジトスペース」が必要です。「アジトスペース」は子どもが大人から隠れる場所です。そこでは子どもの独立性、自立性を育みます。秘密基地という小さな空間を自分たちでつくることによって、子どもの共同体意識を育み、環境形成力を開発すると考えています。

そして、「アナークスペース」です。これは大人が造った整理された場所ではなくて、工事現場であるとか、あるいは廃屋のような捨てられた場所、建設途上、材料置き場みたいなところです。そういう場所は子どもにとって大変魅力的な場所で、そのような所で子どもの想像力は発揮されます。一九五〇年ごろ、デンマークのソーレンセンという造園学者が、そういう情景を見て、アドベンチャープレイグラウンドというものを造りました。これは、「冒険あそび場」と訳されていますが、廃材置き場みたい



▲図④ 横浜におけるあそび空間量の比較
1955年から1975年ころまでに、大都市ではあそび空間は20分の1に減少。

も、アドベンチャープレイングラウンドの影響を大受けています。あそび空間はどのように変化してきたか、一九七〇年から七五年に横浜におけるあそび空間量の比較調査をしました。子どもがどういふところで遊んでいるかということを開き、かつその親の世代

なものをそのままあそび場にするという構成で造ったものです。ただ、危険性もありますので、必ずブレリーダーという大人が必要になります。最近、東京・世田谷区の羽根木公園のプレーパークが大変注目を浴びています。この世田谷のプレーパーク

にも、子ども時代にどういふところで遊んでいたかを聞きました。その結果、一九五五年ごろの子どものあそび空間は、図④に示すようにとても大きかったことがわかります。一九七五年ではそれがかなり小さくなっています。二〇〇三年の調査では、さらに小さくなっていました。子どものあそび空間は、全国的に見ても、一九七四年から二〇〇三年の間に五分の二ぐらいに減っています。

私たちは子どもが元気に活動する空間を再び幼稚園、保育所、学校、公園という場だけでなく、都市のすべての場所に復活させねばなりません。それは子どもに代わって、社会に大きい声を出していかなければなりません。前掲の『逝きし日の面影』の中でも百五十年前の外国人たちは当時の日本人がいかに子どもにやさしく接していたかと感嘆しています。「子どもにやさしい都市」を復活しなければなりません。

(環境建築家 放送大学教授)